

「無形文化遺産」と科学館の役割

上羽 貴大

2026年7月5日から10日まで、筆者は中国・南京に滞在し、「Teaching and Learning with East Asian Shared Heritage (東アジアの共有遺産を通じた教育と学習)」の第3回ワークショップに参加しました。これは、ユネスコ東アジア地域事務所、アジア太平洋無形文化遺産国際研修センター(CRIHAP)、アジア太平洋無形文化遺産国際情報ネットワークセンター(IHCHAP)が進めてきた事業です。日本、モンゴル、中国の3カ国から、学校の教員やカリキュラム開発者、博物館などの文化施設関係者17名が参加し、学校と文化施設が連携し、無形文化遺産を教育に取り入れる方法を学びあいました。



開会式で授与された参加証明書。
参加者としての責任を感じました。

1. 無形文化遺産とは

ワークショップは、「無形文化遺産」とはなにかを整理するところから始まりました。無形文化遺産と聞くと、古くから伝わる祭りや芸能、職人技を思い浮かべます。しかし、単に古いことや、珍しさで決まるものではありません。最も大切なのは、その文化を実践するコミュニティ自身が、自分たちの遺産だと認識していることです。また、ユネスコに登録されることは、「ほかの文化より価値が高い」ことを示すものではありません。また昔の形を一切変えず保存することが目的でもなく、社会や環境に応じて変化しながら、次の世代へ受け継がれていくことを意義とします。作り手の手の感覚、自然との付き合い方など、実践には形がないからこそ、それが存在することをきちんと認識し、担い手とともに伝え方を考える必要があります。教育は、そのための重要な方法なのです。

2. 無形文化遺産と科学館

無形文化遺産は、科学館になにか関係あるのでしょうか？ 大阪市立科学館にも、無形文化遺産と関係する展示があります。たとえば常設展示では、生薬や堺打刃物など、地域で受け継がれてきた知識や技術を科学の視点から紹介しています。また、日本酒をテーマにした実験教室や、日本の伝統的な防水加工技術である柿渋を紹介するプチサイエンスショーもおこなっています。

これまで筆者は、こうした文化や産業を、科学を身近に学ぶための入り口として捉えてきました。しかし、それを無形文化遺産という視点から考えたことは、ほとんどありませんでした。科学館での活動をこの新しい視点から捉え直し、学校教育との連携の可能性を考えることが、今回の参加目的でした。

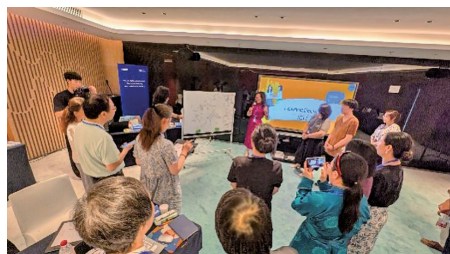
3. 無形文化遺産は「保存」するもの？

今回は、3年間にわたって行われてきたワークショップの最終回です。過去の回にも参加した教員や文化施設関係者からは、これまでの学びをもとに実施した教育プログラムが紹介されました。中国からは、油で炒めた材料を煮てつくる地域の伝統的なお茶（おいしそう！）を題材とした授業、モンゴルからは、馬頭琴やゲルでの暮らしについて理解を深める授業などが発表されました。地域の文化と学校での学びを結びつける多様な実践は、文献〔2〕でも読むことができます。

ワークショップの大部分は、参加者同士のグループワークでした。「学校・文化施設・コミュニティ」の連携を実践に落とし込むための実践的内容です。たとえば、文化施設から学校へ教育事業を提案する場合や、反対に学校から文化施設へ協力を依頼する場合を想定したロールプレイや、「学校や文化施設がプログラムを計画・実施するときに、何が障壁になるのかについて」の議論などです。

特に印象に残ったのは、学校で実際に使えるプログラムにするためには、具体的な授業の形まで考えなければならないということです。学習指導要領との関係だけでなく、対象とする学年や人数、45分授業を何時間使うのか、年間のどの時期に組み込むのかといった条件に合わなければ、よいアイデアでも学校では実施できません。中国の教員からは、この点が繰り返し強調されていました。

国を越えた教育プログラムを考える活動もありました。筆者のグループでは、大阪市立科学館の生薬展示を手がかりに、日本の漢方と中国の伝統医学を比較し、両国の生徒が互いの共通点と違いを学ぶ交流プログラムを考えました。無形文化遺産を通して、文化だけでなく、科学や歴史、異なる社会への理解も深められます。模擬的な計画立案のワークでしたが、ぜひ実際にやってみてみたいきたら面白そうです。

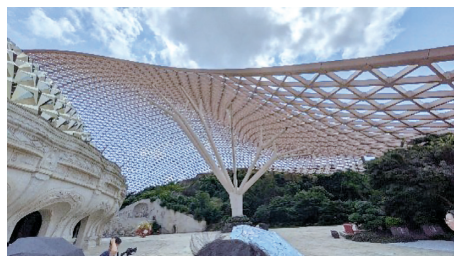


ワークショップの様子。グループワークが中心。

4. 南京で見た、技術を見せる場所

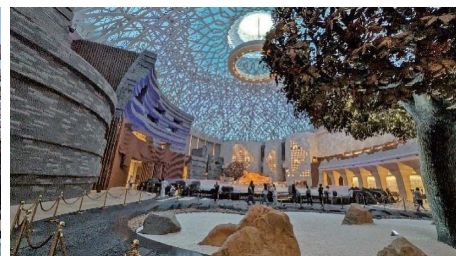
研修の一日は、南京市内の文化施設「牛首山文化観光区」を訪ねるエクスカージョンに充てられました。牛首山は、もともと角のような2つの峰があったのが、旧日本軍の占領下で鉄鉱石の採掘が始まり、戦後も採掘が続いたため、大きく削られ、やがて巨大な採掘跡になりました。現在の仏頂宮は、その採掘跡を利用して建てられています。内部には巨大な涅槃像と、仏舍利を納める絢爛豪華な空間に圧倒されました。石彫、木工、金工、漆、彩色など、多種多様な装飾がこれでもかというほど盛り込まれています。宗教施設であると同時に、地域の工芸技術と産業を総動員して見せる巨大なショーケース、あるいは仏教を主題とするテーマパークのようにも感じられました。日本の牛久大仏を思い出しました。ちなみに、中国からの参加者の感想を聞いてみたところ、中国でもあまり一般的なものではないようでした。

ほかにも鄭和（明代の偉大な航海士）の記念施設を訪れ、また南京の伝統産業である金箔職人から、伝統を未来に繋げることについて講演を聴くなど、充実の内容でした。金箔張りの体験もあったのですが、詳しいチュートリアルもないままぶっつけ本番で、ほとんどの参加者が失敗していました…。



牛首山文化観光区。

(左上) 失われたかつての峰をかたどる建築。



(右上) テーマパークのような巨大空間の涅槃像。

(左下) 金箔貼り体験の筆者の完成品。「南京」と読めますか？



(右下) ゼリガニは南京の夏の名物とのこと。



5. おまけ：ホテルでの発見

ある晩、ピュッフェ会場の一角で、10歳くらいの子どもの誕生日パーティーが開かれていました。友達と保護者が集まる中、なんとサイエンスショーが始まったのです。液体窒素を使った実験で、最後はアイスクリームを作って配ります。子どもたちは、口元から白い冷気を吐き出して大喜びでした。イベント会社によるパッケージでしょうか。科学教育の場ではなく、個人の誕生日の娯楽としてサイエンスショーが選ばれ、子どもたちを熱狂させていることを、同業者としてうれしく眺めました。

6. ワークショップに参加して

今回のワークショップを振り返ると、全体を貫いていたキーワードは「respect」だったように思います。文化遺産を実践し、受け継いできたコミュニティ、文化を教育プログラムへと組み立てる専門性をもつ博物館や文化施設、そして教育の現場を担う学校。それぞれが異なる知識や役割をもち、互いを尊重し、信頼して協力することで、文化遺産を次の世代へつないでいくことができます。

そして、今回最も強く感じたのは、国際的な連携を深めていく必要があるということです。開催地が南京だと聞いたとき、筆者が最初に思い浮かべたのは、旧日本軍がこの地で引き起こした残酷な歴史でした。滞在期間には、盧溝橋事件が起きた7月7日も含まれていました。しかしながら、現地で危険を感じることは一度もなく、安心して研修に参加することができました。中国、日本、モンゴルから集まった参加者は、国際的な緊張とは距離を置き、研修中も夕食の席でも、真面目に議論したり、冗談を言ってふざけたりと、おだやかで友好的な空間を共有していました。

ワークショップでは、「shared heritage」という考え方も紹介されました。これは、異なる地域やコミュニティに共通して見られる文化遺産を指します。今回も、日本、中国、モンゴルに共通する書道文化が話題になりました。似ているところだけでなく、それぞれの違いを知ることは、その文化を担う人々や社会を、より深く理解することにもつながります。歴史や国境を越えて文化をともに学ぶ機会を、科学館の活動にも生かしていきたいと思います。

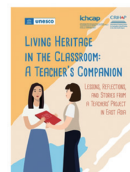
【参考文献】

[1] “Bringing Shared Heritage into the Classroom: East Asia’s Three-Year Journey Culminates in Nanjing”, UNESCO公式サイト ニュース記事, 2026年7月17日 (リンクは右の2次元コード)



[2] Living Heritage in the classroom: a teacher’s companion; lessons, reflections, and stories from a teachers' project in East Asia

過去2回のワークショップの成果として出版された、無形文化遺産をどのように教育にとりいれるかのガイドブックです。日本、中国、韓国、モンゴルでの実践例が紹介されています。会場でも配布されました。インターネットで無料公開されています (リンクは右の2次元コード)。



上羽 貴大 (うえば・たかひろ) 大阪市立科学館 学芸員